
ファンタジーな居候と共に生き抜いてやる！！

オテオテ君神拳伝承者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーな居候と共に生き抜いてやる！！

【Nコード】

N5627K

【作者名】

オテオテ君神拳伝承者

【あらすじ】

北連丘町に住む高校生、西條候樹くさいじょう こうきくは、自分の体の中に不思議な居候を宿していた。愉快至上主義の性格破綻者、という性質の悪い性格だけど仲良く平和に暮らしていた。

ある日、友人の森野裕志くもりの ひろしくと昼食を取っていると、クラスのアイドルの橘霧樺くたちはな きりかく呼び出され、そこで継承者くインヘリターくという者たちの存在を告げられる。候樹達に襲いかかる継承者達、候樹の命運やいかに――

一話・色々と普通じゃないぞ!! (前書き)

前の話に行き詰ってこの小説に逃げ込みました・・・行き当たりばったりでかいてるので矛盾とかでるかもしれません

6 / 27 一話が編集集中全部消えたので一から全部書きなおしました

一話：色々と普通じゃないぞ！！

俺、西條候樹《さいじょう こうき》、北連丘《きたれんおか》高校に通う16歳の高校一年生だ。

成績は・・・中の上くらいかな、一応赤点は取ったことがない。身長はやや高めで、多分やせ型に入る体型である。容姿もまあ普通だ。趣味は、マンガにアニメにゲームにPソc o n s e t c . . . といったオタクだが、これも一般的な部類に入るだろう。

・・・だけど俺には唯一つ、一般的な高校生からかけ離れている要因を持っている。それが・・・

『候樹くゝん、今度は何か面白い話は無いのかゝい』

これである。一応言っておくが、今俺は無人のトイレにいる。

つまり俺の周りには人がいないということだ。それなのにも関わらず、俺に話しかけてくる。

そして、こいつは俺にも見えない。ちなみに幽霊でもない。こいつは・・・

『ねえ、聞いているのかゝい候樹くゝん』

ちよ、やかましい！・・・話がずれたか。こいつは・・・

俺の中に住んでるんだ

この言葉を聞いて痛い奴だと思った人、残念ながら俺の精神はまだ終わってはいない。かといって2つ目の人格というものでもない。嘘でもなく、実際に俺の中に住んでいるんだ。

こいつ・・・俺は居候と呼んでるからそう言うぞ？が最初に話しかけてきたのは、確か9歳頃のこと。初めて俺に部屋が与えられて数日後のことだった。

その時は家に誰もおらず、独りで部屋でベッドの上でぼくとしているときに、突然居候の声が頭に響いた。

このときは流石に俺もびっくりして、ベッドの上から転げ落ちて小指を強打した。そして尚も居候が話しかけてきた。

最初は怖がって耳をふさいでシートにくるまっていたが、段々落ちてきて、ようやく居候の話がきけるようになったのは3時間くらいたった時だった。

居候曰く、俺が生まれた時から俺の中に住んでたらしく、俺が一人になるのを見計らって話しかけてきたらしい。まったくいい迷惑だよ本当に。

ちなみに心の中で会話できるので声を出す必要がないのは助かった。

最初はものすごい嫌がったが、徐々に打ち解けて、今じゃあ当たり前に話している。一人のときはいい話相手だ。・・・時々うざいが

『候樹くうううううううん!!!!!!!!!!!!!!面白いはなしいいいいいいい!-!』

だああああああ!-!-!やかましい!-!-!-!-!-!-!-!-!-!-!-!-!

うざいというのは、こいつの性格だ。この野郎、子供っぽくてへらへらしてるので時々殴りたくなるほどだ。

ちなみにこいつは男だ。声の質が男だからな

げえっ、チャイムが鳴りやがった!!

『はっはっは、それぞれがんばれ』

貴様は少しだまっていろおおおおおお!!

なんとか先生が来るギリギリのタイミングで教室に到着して事なきを得た俺は、4時間目終了まで適当に授業を受け、耐えていた。そして現在昼休み、弁当を取り出して食べようとすると

「候樹、一緒に食おうぜ」

と言って、弁当を持って俺に近づいてくる男子生徒がいた。

こいつの名は森野裕志《もりの ひろし》、中二の頃からの付き合いだ。

運動神経抜群で、サッカー部に入っており、エースの座に君臨しているらしい。成績は俺と同じくらいで、しかしたまにへまやって赤点取ることもある。

そしてイケメン、もう一度言う、イケメンだ。黒のストレートヘアにシュツとした鋭い輪郭、適度に焼けた肌に高い鼻。

その容姿でサッカー部のエースということもあり、かなりモテると思うのだが、あいにくこいつは重度のオタクでもあり、それが女子の人気を微妙なものにしている。

しかし、イケメンでオタクというギャップがいいのか、隠れファンてきなものも存在してるらしい。

中二のとき、席がえのときになぜか隣にすることが多く、気さくな性格で帰り道も一緒なので、段々仲が良くなっていた。中3の時も同じクラスで、隣になることが多かった。そして高校に進学するときも同じ高校で同じクラス・・・なぜか作為のようなものを感じる時がある。

「ああ、いいぞ」

と言うと、裕志が隣の空いている席にすわる

ちなみに今は離れた席にいる。が、これからまた隣になることが多くなるのだろっな

「さて候樹、さっそくだがお前の骨付きから揚げをもらっぜー!」

「させるものか!というかお前焼き肉あるんだからそっち食べよ!」

「つねねえな、ここはその骨付きから揚げを俺にあ〜んと言って喰わせるのが正しい答えじゃねえのか?」

「あいにく男にやるおかずはない」

「ちっ、しゃーねーな。誰か俺にあ〜んをしてくれる奴はいねえのか?」

『ここでああん?とかやったら面白いぞ!候樹君!』

そんなシャツ。ルの寸劇でやったネタは使わんど!

『ちえ、つまんないの』

はあ、しかしほんと平和だなあ。というか、いつもどおりだな

『・・・候樹くん、そのいつもどおりに、今回は当てはまらないかもよ？』

あ？どういことだそりゃあ

「ほんとつめえ・・・・・・・・・・」

ん？裕志の動きが固まったぞ？

「あの、候樹君？」

後ろから声をかけられた。振り向いて見ると・・・

美少女がいた。本物の美少女。

その美少女は、俺と同じクラスの橘霧樺《たちばな きりか》である。

言ってしまうと、このクラスのアイドルだ。流れるような腰まである黒いサラサラな髪の毛、線が細く男子の理想ともいえるスタイル、ぱつちりとした目に長いまつげ、健康的な白い肌、小さくてかわいい唇。

さらに成績優秀であり、性格はおとなしめ。ほとんどの男子、女子が憧れている。

「え、あ、何か用？」

と、そんな美少女に話しかけられてしどろもどろな口調になってしまう。

『はっはっは、今の候樹君本当におもしろいや〜』

ええい！少し黙れ下郎め！俺はこの事態を円滑に進めるために脳みその処理を会話に費やしてるんだ！

「えと、急で悪いんだけど、その・・・」

な、なんだ？この展開は・・・

「放課後、屋上で二人きりで話したいことがあるの」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

これ、なんて夢？

「話・色々と普通じゃないぞ!!」（後書き）

かなり変わってしまった・・・一応これが一話目でございます

二話：電波！？ファンタジー！？*改正しました（前書き）

見直してみても流れがおかしかったので、屋上の部分直しました。
あゝ、こんな調子で大丈夫だろうか・・・

二話：電波！？ファンタジー！？*改正しました

まあ、なんだかんだで放課後だ。今俺は屋上に向かう階段をのぼっているのだ。

・・・あゝ昼休みは本当に危なかった。

裕志からは「候樹いいいいいい！！貴様俺を差し置いて橘さんとしつぱり行く気かあああああ！！」

とか意味不明な言葉とともに殴りかかってくるわ、

何かいつの間にかクラス内でできていた「橘霧樺護衛衆」なるものから制裁加えられそうになるわ、

一歩間違えれば入院していたかもしれないレベルだった。

というか、金属バット振り回されたときは本当に死ぬかと思った・・・。

ちなみにその時居候がものすごい楽しんでるようだったのが癪だった。

ああ、なんで殴れないんだ・・・。

まあそんなことはさておき、屋上の扉に着いた。

まあ最近では自殺が多発しているとかで、多くの高校は屋上を立ち入り禁止にしているらしいが、我が高校はそんなことはない。

がちゃっ・・・

扉を開いた。すると、フェンス側に橘がいた。何か景色をみているんだと思う。

あゝ、告白か？いやいや待て、俺橘に何かしたっけ？・・・脳内グーグル検索結果、該当項目なしだ。

まあ当たり前だろう。高嶺の花とも言える橘に話しかけられる度胸は、自慢じゃないけど無い。

はっ！まさか一目ぼれ！？・・・それはない。そんな容姿はしていない

『自虐していると逆にそうだと言ってるようにも聞こえるよ』

やかましい、とりあえずそんなことは思っていない。断じて！！

とりあえず、話しかけてみるか

「あゝ、橘？来たけど・・・」

「あ、候樹君」

振り向き美人という言葉も入るか。キューティクルが半端ねえなおい

「何か用か？」

「えゝと・・・前から思ってたんだけど、今日思い切って言っね。」

ちよつとちよつと、この流れ告白ととってもよろしいのか！？

「候樹君あのね」

つと、何か急に真面目な表情になった。やっぱりか？やっぱりなのか！？

「私、前からあなたのこと・・・」

この流れは間違いなく告白！―！ちょ、ちょっとまで、俺なんて受け答えしたらいいんだ！でもでも、本当に言われたら少し悩んだ上で
イエ―

「ずっと、継承者《インヘリター》だと思ってたの」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

え？

「あの、ごめん橘、今何て言った？」

「だから、あなたをずっと継承者《インヘリター》と思ってたって
言っただけど・・・」

もしかしてあれか？電波？中二病患者？どちらにしてもこの発言は
イミフすぎる。

『いんへりたー、ねえ。何なんだろうーねそれ』

俺に聞くな！

「あ、あの・・・分からない？」

「まあ、はっきり言わせてもらおうと」

大体そんな中二病設定みたいな俺が持つてるわけ・・・・・・・・

『ん？？どしたの候樹く〜ん』

いた。多分違うだろうけどこいつだ。

「えっと、一つ聞きたいことがあるんだけど・・・」

「え、ああ・・・何だ？」

「候樹君の中に、もう一人の人がいると思うんだけど・・・」

やっぱりいいいいいい！！

「ナ、ナンノコトダロウナ」

「・・・とぼけないでくれる？」

隠そうとしたけどダメでした！

『ははは、そんなあからさまに片言じゃばれるにきまつてるじゃないか』

わかってらあ！！まあ・・・隠すほどでもないけどさあ

「・・・いる。」

「やっぱり・・・あなたも継承者・・・」

「いや、その継承者って何？」

俺は居候と付き合って長いけど、一度もそんな単語きいたことないから

「じゃあ・・・あ、立ち話するのも疲れるから、座る？」

「あ、ああ。じゃあ」

というわけで、橘の隣に座ることにした。しかしどんなトンデモ単語が飛び出してくるんだ？

「継承者っていうのはね、つまりこことは異なる世界・・・異世界からやってきた人物の魂を持ってる、自分ともう一つの魂を持つ人の事を言うの。」

・・・ほら来たあ！！異世界とか出てきたし！てかもう一つの魂？異世界から来た魂！？この居候がそんな凄い奴なの！？

『あゝ、そうだったっけか。いやゝ、忘れてた』

忘れるなそんなことは！！というか、信じられん・・・

「異世界には色々あるんだけど、大体が魔法とかが存在するファンタジーの世界ね。」

そこからやってきた魂は生前持ってた力を保有していて、その魂が継承者の中で目覚めるとその元々持ってた力を発揮することができるの。魔法とか剣術とか、そういうの。」

かなりファンタジー要素が積み込まれてるぞ！っ！魔法って・・・じゃあお前は魔法とか使えるのか居候！

『使えないよ』

即答かよ！っ！か、そんな御大層なやつじゃあないだろこいつ・・・得体が知れないから断言はできないけどさ・・・一応聞いてみるか。一応な！！

「橘は魔法とか使えるのか？」

「う、うん。私は魔剣士の魂だから、魔法とかは使える。後・・・剣術とか」

魔剣士・・・ねえ。魔法を使えるとか言えるなんてよっぱどだなあ
橘って・・・中二病だったら痛いとか言いようがないが

『それは言いすぎでしょう、それに本当に使えるかもしれないよ
く？』

いやいや、勝手に魔法使えるとか言ってるのを鵜呑みにする奴はほとんどのいないと思うぞ？まあ、本当に使えると言っなら

「今使えるのか？」

「え、使えるけどここじゃちよつと・・・無理かな・・・？」

「何で？」

「私の場合は戦闘魔法に特化してるから・・・」

「・・・そうか」

おいおい、誤魔化してるっていうことか？戦闘に特化してるから使えない・・・って、そういう設定？まあ、ここは橘を気遣って言わないでおくことにしようか。・・・それでも、つつこんでおくことはつつこんでおこうか、今の話には矛盾がある。

「なあ、橘の話だったら俺にも何か力が目覚めてるんじゃないのか？」

「うーん・・・その筈なんだけど、何でかな・・・完全じゃないとか」

なんだそりゃ・・・まあいいか、一応聞いただけだし

「もう一つあるんだけど・・・いいかな？」

おっと、まだあるのか

「目覚めてる継承者の中には、その力を悪用する人もいるから気を付けてね。」

「あゝ・・・分かった」

返事はしておこうか。

「あ、話はそれだけだから。」

「あ、ああ・・・そうか」

橋が立つて扉の方に歩いて行った。

・・・しかし、異世界ねえ。居候のこともあるし、それは無いとは言えないけど・・・なんだかなあ

「あ、そうだ忘れてた」

と、急に俺の方に振り向いた。

「森野君にもこの事を話すから、明日ここに来てくれるように言うておいてくれないかな？」

・・・え、も、もしかして

「うん、森野君も継承者だから。でも、本人には自覚がなくて、半分目覚めてる・・・って感じかな。」

あいつもか・・・まあいいが。

「ああ、わかった・・・話しておく」
「それじゃ、またね」

と言つて橋は扉の向こうに去つて行つた。

『うゝん、これはおもしろくなつてきたゝ』

・・・おい居候

『何ゝ?』

本当にお前は異世界から来たのか? 忘れたじゃあ済まされないぞ?

『そんなこと言われてもねえゝ・・・今まで忘れてたからねゝ俺。
まあ、こんな存在だからそんな気はするんだけどねえ』

はあ・・・まあいい。とりあえず帰つてからゆっくり聞かせてもら
おうか。

『えゝ』

えゝじゃない。話せと言つてるんだ

『むゝ・・・しょうがないなあ』

そして教室に荷物を取りに行った。教室のドアを開けると・・・

「おらあああああああああ！！！！！！！」

裕志が殴りかかってきた。

「うおおおおおと！！！！！！！！！！」

とつさに避けた。すると裕志が・・・

「ごへえあつ！！！！！！！！！！」

ドアの柱に頭をぶつけて奇声を発した。

「アホかお前は」

「や、やかましいっ・・・・」

頭をなでながらふらふらと立ち上がった。

「こんの裏切り者が・・・・俺より先に彼女つくるリア充は即刻切り刻まねばあ・・・・」

「わけのわからんこと言うな。それより・・・橘が、お前に明日屋上来的ように言ってたぞ」

「！！！！マジか！！！！もしかしてお前利用されたか？」

おい、にやにや顔で俺に近寄るんじゃない。

「まあそついうわけだ。明日は楽しんで来い」

「ようやく俺に春が・・・・ひゃっほーい！！！！！！」

浮かれてるようなので、放置して帰るとしよう

「おいおい候樹、俺という親友置いて一人で帰るつもりかい？」

うっとおしい……

「裏切り者じゃないのか？俺は」

「なぐんのことだ候樹、一緒に帰ろうぜ」

こいつのノリが居候と同じになってきた……

『はっはっは、面白いねえやつぱり』

……こいつは楽しめればなんでもいいのだろうか……

(side out)

(??? side)

ああ、あいつらは僕と同じか……僕と同じ……継承者……

でも、一番強いのは僕さ……それを分かせてあげないとね……

『くくく、楽しませてくれるんだろうな？』

ああ、たぶん……つまらないと思うよ？残念だけど……

だって、僕に敵うやつなんて……いないからさ……

二話・電波！？ファンタジー！？*改正しました（後書き）

やばい、ネタがなくなってきた・・・

三話：ちょ、なんか嫌な予感がするんだけど！？*改正しました（前書き）

推敲して書くのってつらい・・・

その場その場で思いついて書いてるので、食い違いとかあるかもしれません

4 / 5 改正。 前回の話を直したので、流れに合うようにしました。

三話：ちょ、なんか嫌な予感がするんだけど！？*改正しました

帰り道、隣の裕志が顔を腫らしている。実はあの後「橘霧樺護衛衆」に、裕志が橘に呼ばれていることがバレて肅清をくらったらしい。ざまあみろ

「大丈夫か〜裕志くん？」

茶化すような口調で言ってみる。うわ、この居候のような口調、こういう場面ではよく合うよなあ

「いつつ・・・でもこの痛みなんて今の俺には関係ナッスイング！ひがみ何かには負けないぜ〜！」

ポジティブシンキング過ぎるだろ・・・

『ん〜、ポジティブなのはいいことだよ〜』

モノには限度というものがあってな・・・

「あ、そうだ。候樹聞いたか？昨日のニュース」
「ニュース？」

興味無いから見てないけど・・・

「なんでも近くの公園で死体が見つかったってよ、しかも頭から股にかけて真っ二つ」

「うわっ・・・なんだそれ」

『ほほ〜、真っ二つとはすごいねえ』

感心するな！！

「深夜ぐらいに見つかったらいいからよ、早めに寝ることだな。」

「まあそつだな。」

そんな会話を交わして、俺は帰路についた。

で、俺の部屋だ。さつさといつを問い詰めなければ・・・

『あゝ、ちよつといいゝ？』

何だ

『俺のことなんだけどさゝ・・・まあ、言つよ？』

早く言えこの野郎

『俺さあ、候樹君が生まれる以前の記憶がないのさゝ』

・・・おい、どうゆつことだ

『だから、何にも覚えてないんだってばゝ。自分が男だつてこと以外は』

おい、嘘ついてるんじゃないんだろうな？記憶喪失ネタでごまかそうとしてんじゃないだろうな？

『本当だつてば。候樹君が生まれた時に、記憶まつさらな状態だったんだからさあ』

・・・それじゃあ何の意味も無いじゃ〜ん・・・

『まあ、いつか思い出すと思うよ〜多分』

期待しないで待つておくか・・・

リモコン取り出してテレビ電源をつけた。この時間帯は夕方のニュースとかであんま面白いの無いんだよなあ・・・ん、これは・・・

「次のニュースです。一昨日北連丘公園で発見された変死体ですが

」

・・・このニュース、裕志が言つてた奴か。物騒だなほんとうに・・・

・

「——ここで臨時ニュースが入りました。先ほど午後5時、新たな変死体が発見されました。発見されたのは北連丘ホテルの——」

・・・おいおい、ここまでやるか・・・

『ん〜、面白そうだねえほんとに』

面白くねーよ・・・何なんだろうな・・・

——継承者の中にはその力を悪用する人もいるから気を付けて——

・・・まさかな。居候のこともあるが、継承者なんて・・・
いや、でも・・・橘は俺の中に居候がいることを知っている口ぶり
で・・・

・・・何なんだよ、一体!!

「以上、ニュースでした」

(side out)

(??? side)

はははははははははははははははは!!...さあ、これだけやったら出て
くるだろ・・・

『随分やったな。おい。まあこれで楽しめるっていうなら悪くはね
えがな・・・くくく』

ああ、これで出てくる・・・そして・・・

お前らを狩ってやる

(side out)

(候樹 side)

翌日、いつものように学校に行き、いつものように授業を受けてい
た・・・いや、変わったこともあったな。

休み時間に、裕志が命をかけた鬼ごっこをしている風景が加わった

な。追いかけてるのが鬼の形相だったからなあ。あながちリアル鬼ごつこと言っても差支えないんじゃないか？

ちなみに居候が爆笑していた。やかましいと思ったがどうせ聞き入れられないだろうなこいつのことだから。

で、放課後である。どうやら裕志は生き残ったらしく、今橋のいる屋上へ向かっている。

あんなトンデモ話聞かされたらどういふ対応するのか見物だな。

『いやゝ、本当に楽しみだねゝ』

今回は居候に同意しておこつ。

『・・・・・・・・ん？』

あ？どうした居候・・・・・・・・

ぞくんつ――

!!!!!!!!!!!!!!

・・・・・・・・なんだ、今の・・・・首筋に刃物突き付けられたような感じだ・・・・・・・・

周りを見渡してみる。・・・・不審な奴、無し。

ほとんどが帰りの準備か、友達とくつちゃべってるか、部活の準備だ。

・・・・気のせいか・・・・

『ん…………』

めずらしく居候が唸っている。どうした？

『あゝ、たぶん気のせいだと思うからねえ』

……こいつも感じたのか。
なんなんだ……これはいつたい

「候樹……………」

あ、裕志が帰ってきた

「おお、どうだったよ話は。」

「おい候樹、橘さんってあれか？電波なのか？」

反応は、こうだ。まあ無理ないか、いきなりあんな話されて急に全部信じるなんていうのが無理な話だ。俺だって未だに全部は信じてはいないんだからさ。

「さあな。まあとりあえず、望んだ事態にことは進んだか？」

「全然だ。急に意味不明なこと聞かされた、継承者だとか異世界だとかよ。」

やっぱ信じて無いか、まあしょうがない。

「まあ…………ドンマイ」

と言って肩を叩いてやる。

「おあつ・・・別にいいよ、あんな娘だとは思ってなかったし」

『はははっ、理想が破れるとこんな風になるんだねえ』

まっただ

「さて、帰るか。」

「あ、俺部活だから。」

「・・・ところで裕志、さっきからあそこで護衛衆の奴らが裕志抹殺とかわめいてるぞ」

「のわあああああ！？」と、とりあえず話聞いてくれ！！」

こんな風に、今日の学校は終わった。本当にいつもどおりだな、今日も・・・

(side out)

(橘 side)

やっぱり・・・信じてもらえなかった。

『まあいいじゃねえか。あの・・・コウキってやつは信じてくれたんだろ？』

うん・・・そうだけど。

『そんじゃまあいいじゃねえか一応。あのヒロシっていうガキもいずれわかるさ』

そうかな・・・？

『そうだって。．．．それよりよ』

うん、わかってる。最近起こってる猟奇殺人事件．．．

『ああ、間違いなく．．．俺たちと同じタチの奴だ。』

継承者．．．次は必ず止めてみせる．．．

『そのいきだ。さあ、行こつぜ？』

．．．うん。

候樹君．．．森野君．．．どうか無事で．．．

三話：ちょ、なんか嫌な予感がするんだけど！？*改正しました（後書き）

次回から初めてのバトルにはいるかもしれません。

四話：おいおい、何だってんだよ裕志！！

今日は裕志のいない帰り道だ。まあよくあることだ。あいつサッカー部だし。

さてと、今日も何事もない一日……。にはないことがあったな。さっきの……。気配？みたいなものだ。ぞくつと、背筋が凍えるような……。そんな気配だった。

「何にも無いといいけどさあ……。」「

『ん、何だっただろうね、あの気配は』

知らねーよ。

と、居候と脳内会話をしていると

——ドンッ——

誰かにぶつかった。やべっ、ぼーっとしてた

「あ、すみません」

「あーいや、僕もよそ見してたからね。こっちこそごめんね」

ぶつかった相手は、二十代半ばといった容姿の男だった。背が高いなおい、俺身長１７５なのに頭一つ分でかい。

「じゃあこれで」

と言って、男は去って行った。

『すみませんは無いんじゃないの？』

・・・素直にそれは反省しよう。

とりあえず早く帰ろう

翌日、いつものように登校すると、裕志が机に突っ伏していた。

「裕志、どうしたんだ？」

声をかけてみる。すると裕志がびくつとした後にこっちを向いた。

「よ、よう候樹」

何か、おどおどしている？変な奴だな・・・

「どうした？そんなにびくびくして」

「あ、ああ、何でもねえ。」

「・・・そうか？ならいいけど」

おかしい、絶対何かある。こんなに挙動不審な裕志は初めてみるかな。

そう考えながら自分の席に座った。

『ん？』

どうした？居候

『何か、裕志君から・・・変な感じがするんだけどねえ』

変な感じ？

『気のせいかな？』

気のせい、ということでは片付けられないかもしれない・・・が、
わからない・・・

裕志に一体何があったっていうんだ？

ふと、視界に入った橘。裕志を見て・・・何か複雑そうな顔をして
いる。

また、裕志も橘を見て何か言いたそうな顔をしている。

そして、そんな二人を見て嫉妬の炎を燃やすクラスの男子諸君と橘
霧樺護衛衆が裕志死ねといった顔をしている。

色々な意味で妙な空気が流れている、というか最後の奴らは場違い
にもほどがあるだろ！！

——キーンコーンカーンコーン——

そして、チャイムが鳴り、いつものように授業が始まった。

授業が終わり、放課後となった。今日は裕志は部活らしいが、大丈
夫か？あいつ。挙動不審だし命狙われてるし・・・

『今日も鬼ごっこがあつたねえ』

もう慣れた。多分卒業するまでずっと続くだろうなあれは。

と、橘がこっちに近づいてきた。

「候樹君、あの・・・」

「何だ？あの継承者とかいうやつか？」

「そうだけど・・・ちよつと、気を付けてね。」

「・・・気をつける？」

まだ言ってるのか

「うん、夜道は特に・・・」

「ああ、わかった。」

一応返答くらいはしておこうか。それに夜道を気をつけるといふのは当然だな。ニュースで殺人事件も起きてるって言ってたしな。つと、そうだ。橘にはわかるかね

「橘、裕志に何があつたか分かるか？」

「・・・何でもないよ」

怪しい・・・その間はなんだ、おい

「今日のあいっなんかおかしいんだよなあ、で、今朝あいっ与会つたから橘なら何か知ってるかと」

「うっん、本当になんでもないの」

・・・話すつもりはないらしいな。

「そうか。じゃあ、俺帰るな」

「あ、うん。気を付けてね」

軽く会釈して、教室を出ようとする。すると・・・

ゾクンッ

また・・・だ・・・昨日の感覚だ。

教室を見渡してみる。しかし・・・怪しいやつはだれもない。

何なんだよほんと・・・

四話：おいおい、何だってんだよ裕志！！（後書き）

すみません、前話のやつ詐欺でしたorz
次こそはちゃんとしますのでご勘弁を；；

五話：いきなりバトル展開！！？（前書き）

ようやくバトルです。

6 / 29 候樹君の口調変えました

五話：いきなりバトル展開！！？

帰宅後、重大なあることに気が付いた。

「携帯・・・机に入れっぱなしだ・・・」

ちくしょう！何で机の中になんか入れてたんだ俺！！

ああ、俺のせいだよ！隠れて携帯使ってるのばれそうになって机に咄嗟に隠した俺のせいだよちくしょおおお！

『人はそれを自業自得っていうんだよ』

やかましい！！

しかもあれ充電もうすぐ切れそうなんだよ！今日充電しなければ明日が悲惨なことに・・・

『俺の知ったこっちゃないねえ』

ああ、そうかい！でも俺にとっては一大事なんだよ！！

携帯が無いと不便なんだよー高校生としては！メールしたり電話したりネットに繋いだ――

『早く行った方がいいんじゃないの？もう9時だし』

言われなくても分かってる！！！！

「母さん！学校に忘れものしたから取りに行ってくるー！」

「気を付けていきなさいよー！最近物騒だからー！」

さつと取ってしゅつと帰る！！！！

『ふいゝ、やれやれゝ』

現在午後9：30分、学校に到着した。月が昇っていて学校を照らしている。

当然ながら校門はしまっている。しょうがないか・・・
校門をよじ登って入った。よし、だれにも見つかってないな！
誰にも気づかれないうちに気を配りながら校内へ侵入した。

・・・暗いな。

『そうだねゝ。こんな時間に入るのはごめん被りたいねえゝ』

そう言いながらも、声は楽しそうな居候だ。

本当に不気味だなあ、暗闇に包まれた学校というものは。
学校の怪談しかり、七不思議しかり、得てして夜に行われるというものだ。

まあこの学校ではそんな話は聞かないが・・・
それでも不気味であることには変わり無い、さつさと教室へ行つて携帯を取ろう。

『ねゝ、候樹くゝん』

何だ、今は急いでるんだ。

『さつきから見られてるような感じがするんだけどさゝ』

・・・見られてる？

辺りを見回してみる。・・・誰もいないぞ

『んゝ・・・でも確かに・・・』

一応警戒はしておくに越したことはない・・・か。
周りを警戒しながら教室に向かった。

『わっ！！！！！！！！！』

！！！！！！！！！！どうした！？居候！

『おゝ、やっぱりびくんってなっ』

・・・下らんことするな！！！！

『H A H A H A H A 』

うつぜえ・・・

とか言ってる間に教室に着いた。何か新鮮だなこいうのも、できればもう味わいたくはないが。

ともかくドアを開く。ガラガラと音が廊下に響いた。

「びびるな・・・」

さて、ともかくここまで来たんだ。さっさと携帯取ってしまおうか。

自席に向かい、机の中を探った。

「・・・あつた」

携帯は無事発見した。さて、このまま帰るか。

『映画とかだとこの後霊とかが現れるよね』

縁起でもないこと言うな！！　　たぐ、大体ここにはそんな話は無い
って言ってるだろう・・・

居候の自由さに今更ながら腹立ちながらも、廊下に出てドアを閉め、
そのまま帰ろうとした・・・その時

ゾクンツツ

・・・この感覚、帰る時に感じたやつと同じ・・・

『やっぱり、気のせいじゃないねえこれは』

周りを見渡してみる。

どこだ・・・どこにいる・・・

暗闇のせいかな、廊下の風景は見えにくい。・・・にも関わらず、見
つけられた。

「やあ、西條・・・」

俺の後ろの方からそいつは姿を現した。

そいつは、目に少しかかるぐらいの黒髪に、眼鏡をかけた、中肉中

背の平凡なやつだ。眼鏡のせいか、地味な印象を受ける。

しかし見た目とは裏腹に、雰囲気が違う。異質で、不気味なもの。そいつは俺のことを呼んだ。しかし・・・俺の知り合いにこんなやついたっけ

『酷いねえ、その子、同じクラスの子じゃないか』

クラスメートだと？・・・待て、思い出せ・・・

「・・・・・・・・あ」

思い出した。

「忘れていたのかい？同じクラスだっていうのになあ・・・」

「お前、西野か・・・」

こいつは西野。西野邦人《にしのかくにひと》。

クラスメートだというが、会話をしたことが無い。

何度か見かけることはある。しかし、全体的に地味な印象だから、思い出すのに苦労した。

「そうだよ。まったく、覚えてくれもしないのか。」

「話すこともなかったからな。」

「そうか・・・」

・・・こいつが、あの気配の正体・・・なのか？

『・・・・・・・・へ』

今度はなんだ？

『裕志君と同じような感じがするねこの子。・・・何か、一人の体なのに2重に在るというような』

・・・まさか、橘の言ってた・・・

『継承者・・・だろうねえ』

ま、まだ決まったわけじゃあないだろ。・・・一応聞いてみる。

「で、西野は何しにここに？ああ、俺は忘れ物取りにきたんだ」
「・・・僕かい？僕はね・・・」

と、西野がこっちに向かって駆けだしてきた。

「君を殺すためさ」

と、西野の手に長剣が突然現れ、俺を刺そうとした。

「おわあっ！！！！？」

咄嗟にだが避けた。・・・なんだ、なんなんだこれは、というかそんな剣どっから出した！！

「おい、ふざけるな！冗談だとしても性質悪すぎるぞ！」
「ふざけてなんかないよ、僕は本気さ。」

そっついながら剣を振りまわしてくる西野。な、何で俺が・・・

『恨みでもあるんじゃないの？』

何の恨みだよ何の！

その後も剣を振りまわされながら追いかけてた。なんとか走りは俺の方が速かったようで、このまま振り切ってやる！

『・・・候樹君、ストップ』

はあ！？何でだ？

ざんっ！！

突然、何かが斬られる音とともに、俺の前方の天井が崩れ落ちてきた。

「な・・・なんだよこれは」

「くくく、逃がさねえよ？坊主・・・」

西野の声が聞こえてくる。しかし・・・話し方と声色がまったく違う。

振り向いて見ると、そこには長剣を片手に持ち、狂ったような壮絶な笑みを浮かべている西野の姿があった。

「に、西野・・・なのか・・・？」

「ああ、この体はこのガキのものだ。・・・でもよ、中身は違うぜえ？」

と、長剣を片手で構える西野。

「中身・・・だと？」

「ああ、まあこんな貧弱な体じゃあ碌に發揮もできねえが・・・」

と、こっちを見据えた。それと同時に・・・

ゾグンツツツ

今までのよりも強い威圧感を出してきた。

「お前の中にもいるんだろ？もう一人よ、早く出してもらおうか。
・・・断るってんなら、死ぬぜ？」

と言って、悠々とこっちに歩いてくる。くっ、どうしろって言うんだよこんなやつ・・・！

『・・・ん？何だろ・・・』

今度はどうした！？

『何か近づいてくる・・・？』

何か？近づいてくるって・・・

と、その時・・・窓ガラスが割れた。それとともに登場したのが・・・

「橘！？」

「候樹君！！！」

なんと、制服姿の橘と・・・

「俺もいるぞ、候樹！」

「裕志い！？」

赤のシャツに黒ジャージを着た裕志だ。

「はははははははは！！てめえら昨日の奴らか！！おもしれえ、こいつの手助けってやつか！」

と、西野が愉快そうに笑いだした。

「昨日は遅れをとったけど・・・今回はそうはいかない！」
「そのとおりだ！！」

『何かヒーローものでよくある展開だねえ』

おい、空気読め居候！！

「くくく、いいぜえ、昨日は逃がしたが・・・今日は逃がさん！」

と、西野が橘、裕志に向かって駆けだす。

「・・・・・・・・あぁ、今回は逃がさねえよ？」

・・・今の、橘か？声が女のものだけど明らかに男の口調だ！！

「今度は俺もいるんだからなあ！！」

裕志は何も変化無し・・・何か余計だと思っがなあ、裕志は。
つか・・・本当だったんだな、今さらながら

・
・
・
何だこのバトル展開

五話：いきなりバトル展開！！？（後書き）

詰め込んだら長くなった・・・

六話：現実逃避なんかしてる場合じゃねえ！！

拝啓、天国のじいさん。

そちらは今どのように過ごしておいででしょうか？平和に酒でも飲んで楽しくしてますでしょうか？

俺？俺はほんと・・・

「汝を燃やしつくすは天上の業火！！」

暖かい陽気・・・というかもものすごい火の柱の傍で焼かれそうになり

「ちいつ！くははははは！！！！いいじゃねえか！！」

野原を自由に駆けまわって棒を振り回して追いかけてっこしている子どもたち・・・じゃなくて人の身長よりも長い剣を振りまわして、橘や裕志に斬りかかる西野達を傍で見て戦慄していて

『よし、行け行け！はっはっは、凄いいえこれ！』

無邪気に笑う子供・・・なんかじゃなく人の中で勝手に観戦して楽しんでいる居候・・・

本当に素晴らしい光景です（泣）

『ほんとにね、素晴らしい光景だねこれ！』

だから、笑って楽しんでいる場合かあああああ！！こっちにも余波が飛んできてるんだからもちっと真剣になれやああああああああああ！！

「エレクトルニードル・シュート!!」

逃げ回ってたら、裕志が何か呪文唱えた。すると、さっき裕志が放った針の20倍はあるんじゃないだろうかという針・・・というか角？みたいなものが現れ、西野に放たれた。何かバチバチと電流放ってる。

「そんなもんかよっ!!!」

それを西野が長剣で弾いた。が、電流が剣を伝って西野に浴びせられる

「ぐううううっ・・・はは、ひあははははは!! いい! すごい いじゃねえか!!」

それでも効いてないとか何こいつ!!? しかも狂ったような笑い声だしてやがる・・・
マゾか? ドMなのか!!?

「ちっ、まじ狂ってやがる・・・」

橘が苦虫噛み潰したような顔してる。ああ、それもわかるような気がするな・・・

『んっ、しぶといな』

居候もそのたまうが、本当に楽しそうだ

「さあ! もう一度いっくぜえええええええ!!」

西野が獰猛な笑みを浮かべ、風のような凄まじいスピードで橘と裕志に向かっていった。

「はあああああああ！！！！」

橘もそれに負けないようなスピードで駆けて、迎え撃つ。

ガギイイイイイン！！

と、剣同士がぶつかり合う音が廊下中に響いた。ちいつ、鼓膜が破れそうだ・・・
そんな事を考えてる間にも、撃ち合いが続いていく。

西野が剣を振り下ろすと、橘が横つとびで回避し、そこから橘が剣を振ると、西野が長剣で防御し、また橘に向かって剣を振る。

そのような攻防が続けられる。どちらも譲らない戦いだ。

「ニードル・レイン！！」

と、裕志が呪文を唱え、光の針が大量に西野に向かう。・・・が

「じざかしい！！」

と、西野が剣を振り、光の針を全て弾いた。

「隙ありだ！！」

その隙に橘が西野に向かって剣を振りかぶる。って、ダメダメ！！

殺したらダメだっていくらなんでも！と思ってた瞬間

「おらああああああ！！」

と、西野が高速で剣を振り、橘を吹き飛ばした。

「っっ！！！??」

嫌な音とともに廊下をバウンドする橘。

「てめえもだ！！」

と、裕志に向かって西野が駆ける。

「おわあっ！！」

裕志が距離を取ろうとするが、あっという間に西野が裕志の懐に入り込み・・・

「跳べや！！」

「ごほおっ！！！！」

裕志が蹴り飛ばされた。壁にしたたかに打ちつけられ、その後落ちた。せき込んでる

「・・・さて、ついつい忘れていたが・・・」

と、西野がこっちを向いた。

「っー」

「確かてめえも・・・だったな？」

西野が言うつと、風のようなスピードでこっちに向かってきた。ちょ、来るな！！

「いくぞおらああああ！！」

西野が俺に剣を振り下ろしてくる・・・！

「くっ！！」

何とか避けようとするが、速いっ・・・

『あゝ、絶対絶命ってやつかな？』

いつのときものんきだよなあお前は！！

『んゝ、もしかしたら・・・できるかねえゝ・・・』

あ？何言って・・・！

「へえ、よく避けたもんだなあ！」

あ、あぶなっ・・・！間一髪すぎるぞこれ・・・

「くははははは！！さあ、もっと避けてみやがれ！」

と、西野が駆けだし、こっちに剣を振り下ろしてくる。

「おわっ！！」

それも、何とかよけた。

「おらあ！！」

今度は突きを放ってくる。

「ぐっ！？っ ああ！？」

何とか避けはしたが、こんなときにこけてしまった。俺の大馬鹿野郎おおおおおおお！！

「あゝあ、もう終わりかよ．．．つまんねえな！！」

西野が剣を振り下ろしてくる。くっ、体動かしたくてもうこけないっ．．．！もうだめかなのか．．．！

『おゝ、これか』

と、居候の声が聞こえた瞬間．．．意識がシャットダウンした。

(side out)

(side 裕志)

くっ！油断した．．．まさかあんなにはええなんて．．．

「うっ．．．うっ」

さっきの衝撃で咳込む。いってえ．．．

「おい、大丈夫か？」

ああ、大丈夫だ……！候樹は！？

「おわつ！」

奴の攻撃を何とか避けている・・・と、今度は突きを放った。

「ぐっ！？っ
ああ！？」

「っ！！」

「転んだ……あいつ何やってんだ！」

「あゝあ、もう終わりかよ……」

奴が剣を振り上げる。つ・・・動けよ体！

「つまんねえな!!」

劍が振り下ろされた。咄嗟に俺は目を伏せた。すまねえ……候樹……

[illegible]

？何だ・・・何も起こってない・・・？

「あゝあゝ、こんな危ないもん振りまわしちゃって」

・・・候樹か？いや、違う・・・？

目を開けてみる。すると・・・

「っ！？な、なんだと・・・」

奴が剣を振り下ろしたまま驚いていた。それもその筈・・・なぜなら

「まったく、周りもこんなにぼろぼろじゃないか」

候樹が人差し指と親指で刃を受け止めてるからだ・・・

「候・・・樹・・・？」

あれは候樹なのか？いや、口調や雰囲気は全く違う・・・橘さんみたいに別人みたいだ・・・まさか、橘さんが言ってた候樹の中にあるもう一つの魂・・・！？

「そらっ！」

「ぐあっ！！！？」

候樹が奴を殴り飛ばした。すると、奴は壁に打ち付けられ、壁にひびが入った。・・・候樹からは想像できないすげえ力だ・・・

「あゝ、まさかこんなに俺は力持ちだったなんてねえ」

いやいや、力持ちってレベルじゃねーぞそれ！なんていうつつこみを心のなかでして、立ちあがったら・・・

「くくくつ、いいじゃねえか・・・おい!!」

と、奴が立ち上がり、また候樹に襲いかかる。

「あゝ、体使うのなんて初めてなんだけどなゝ・・・よつと」
「なっ!？」

き、消えた・・・!?!どこに・・・

「ほいつと」

どんっ!

「ぐうつ!」

いつのまにか候樹が奴の隣に現れて横脇バラを蹴り飛ばした。その衝撃で奴が廊下と水平に飛んでいった。

「んゝ、いい飛び方だねえ」

と、言っている

「まだ・・・だ！まだまだ足りねえ・・・！」

また奴が立ち上がった。いい加減しつけえ！

「んゝ、本当にしぶといなゝ」

・・・そろそろ俺も入るか。

『ああ、次は――』

ほうほう、ならば・・・

「ニードル・バスター！」

俺の周りに魔法陣を展開して、光の針を無数に作り出し、一斉に放つ。今のところこの系統しか扱えねえけど、便利だなこれ

「うぜえ！！！」

奴が叫び、針を弾いていく。つーかお前の方がうぜえ！！

「よっ！」

また候樹が消え、今度は懷に現れる。

「ちいいいっ！ぜえええりゃああああ！！！」

奴が剣を回転して振りまわすが、候樹は跳び上がり避ける。

「ていつ！」

候樹が空中で一回転し、奴をかかとで蹴り飛ばす。

「ぎっ！！」

奴が前のめりにのけぞる。しめた！

「ニードル・スコール！！」

光の針を大量に出現させ、奴に飛ばす。

「ぐっぐっぐっ！！」

弾いた様子だが、対処しきれなかったらしく、光の針の洗礼を受けて後退する。・・・だが

「俺を忘れんじゃねーよ？」

そこには橘さんがいた。剣を構えて奴に突進する

「はっ！てめえの攻撃なんぞどうにでもできる！！」

と、奴が長剣を盾にするが・・・

「どうかな？」

橘さんがにやりと笑った。

ガギャリッ！

剣同士がぶつかる。そして・・・橘さんの剣から膨大な黒の爆発が起こった。

「があああああっ!!?」

奴が吹っ飛ばされ、廊下の窓を突き破って校庭に落ちた。

「あらら、痛そうだねえ」

候樹よ・・・お前はいつもこんな陽気な奴の相手してたんだな・・・と、しみじみ思っていると、

「ちいつ、しょうがねえ・・・いったん引き返す!!」

と言って奴は逃げ出した。

「ちょ、待て!!」

橘が後を追いかけてようとするが

ファンファンファンファンファン

パトカーが来た。・・・騒ぎすぎたらしいな・・・

「はあ・・・とにかく逃げるぞ!」

橘さんがそう言って反対の窓から飛び降りた。

「あゝ、俺もできるかな」

とか言いながら、候樹は窓から飛び降りた。案外余裕じゃねーか・
・俺なんてこんな高い所からなんて・・

『おい、ぐだぐだ言ってる暇あるのか？』

分かってるよ！！

勇気を振りしぼって窓から飛び降り、3人で逃げに行った。

六話：現実逃避なんかしてる場合じゃねえ！！（後書き）

何か無理やり感じがいなめない・・・
ちよくちよく修正すると思います

七話：勝手に操られて勝手に話がすすんでやがる！！？（前書き）

久しぶりの更新で、書き方が違ってるかもしれません

七話：勝手に操られて勝手に話がすすんでやがる！！？

(side 候樹)

意識が浮上していくのが分かる。脳がはっきりし、感覚も戻ってくる。

・・・え〜と、俺は寝てただっけ？ちょっと思い出してみようか。
携帯を取りに家を抜け出して、そして帰ろうとした後・・・
あ

「ああああああああああああああああああ！！！！！！」
「」

そつだ！！西野！殺される！っていうかあの光景だったらもう俺斬られて死んでる！？

まだ取り溜めしてたレール。ンとかバ。テストとか全部見てないのに
！！何であんなところで――

『まあまあ、落ち着きなよ候樹く〜ん』

・・・あれ、なんで居候もいるんだ・・・ってあれ、ここどこだ？
一面真っ白・・・まさかこれが天国か！？

『違うよ〜、というか候樹君まだ死んでないよ〜』

・・・え？死んでない？

『うん、死んでない』

じゃ、じゃあここどこだよ！こんな真っ白な場所世界中探してもないだろ！

『ああ、ここ君の心の中』

・・・は？

『まあ、精神世界って言ったほうがいいかな。君の内部、そして俺が住んでる場所だよ』

精神世界・・・ん、ということは・・・お前の姿が見れるということか？

『あゝ、それ多分無理。』

は！？何だよ、お前も住んでるって言ったじゃないか！

『実はねえ今君の目の前にいるんだけどさ、君の反応だと、どういう訳か俺の姿見えてないよね？』

・・・は？目の前？・・・見えん、相変わらず真っ白だ

『でしょ？だからまだ無理ってことじゃないかな？』

まだ無理？まだってことは・・・

『多分いずれ見れるんじゃないかな、いつかはわからないけど』

うわゝ、なんだよそれ・・・

『ああ、話戻すけどね、一応君は死んでないよ。』

まあ、それだけでも良しとするか・・・あれ、じゃあなんで俺生きてんだ？あのととき俺西野が剣振り下ろすの確かに見たぞ

『ああ、それね。俺がやったんだよ』

・・・へ？お前が？

『うん、俺が』

どうやってだ？

『候樹君の体借りて、っていうか操って』

勝手に操んじゃねえええええええ！！・・・あ、でもあの時は・・・でもこいつに操られたってのは・・・

『まあ、いいじゃないか。生き残れたんだからさ。』

・・・納得いかんが、とりあえずありがとう

『いえいえ、どういたしまして。・・・あ』

どうした？

『時間だ、じゃあねゝ候樹君くゝん』

「覚えてねえのか？お前この公園の入り口まで橘さんと並走してここまで走ってきたんじゃないか。それにしても凄かったぜ。車と同じくらいの速さだったんじゃないか？ありゃあ」

「おい、人を化け物みたいに言うな。第一俺がそんなにスピード出せるわけないだろ！」

俺の足の速さはクラスの中では結構上位だったけどさ、それでも裕志には勝てたことないし、ましてや車と同等の速度なんて超人技俺にはできないぞ！

「あゝ、それは多分・・・お前の中の奴じゃねえのか？」

うえ！？なんで知ってたんだ！？・・・そういえばあいつ俺の体操ったとか言ってたが・・・

「なあ、そのときの俺って口調とか変わってた？」

「あゝ、そういえば軽い口調だったな。なんか人をおちよくるようなそんな感じだった」

やはりか・・・にしても、あいつそんなことできたのか

「それにものすげえ強かったしな。パンチ一発で・・・西野だったっけ？あいつを壁までぶっ飛ばして、その衝撃で壁にひび入らせたのは流石に驚いたぜ」

おいやりすぎだ居候！！

「候樹くん！！」

ん、この声は・・・

「よかった、目を覚まして・・・」

橘が駆け寄ってきて、安堵の表情をしてる。・・・あ、さっきの不良口調とのギャップが・・・まあそんなことは置いといて

「心配掛けたな。」

一応そう言っておく

「まあ気にすんな候樹、・・・それよりもだ」

「ん？なんだ？」

「西野くん・・・あの人はこの様子だとまたしかけてくるよ、近いうちに必ず」

「・・・まじか」

おいおい、勘弁してくれよ・・・あんな狂人とまたやりあうなんて俺はゴメンだぞ？

「大丈夫だって、俺と橘さんに候樹がいりゃああんな奴ちよちよいのちよいよ!」

「ちよっ・・・裕志!んな無責任なこと・・・」

「うん、今度はもっと苦しくなるかもしれない」

ほらほら、橘もこう言って・・・へ？もっと苦しくなるって、あれよりも更に酷くなるのか！？

「・・・どついうことだ？橘」

「今日闘って気づいたの。彼、このまえより強くなってる」

「・・・この前？この前ってことは・・・」

「えーと、橘はあいつと会ったことがあるのか？」

「まあ、正確には橘さんと俺だけだな」

裕志と橘？・・・まさかあの挙動不審だったのは・・・

「あいつと闘ったから、今日あんなに挙動不審だったのか」

「・・・黙っててごめんな。でもお前をまきこみたくはなかったんだよ」

「いや、いいさ・・・でも」

裕志に視線を向けた、こいつあんなこと言ってたが・・・

「なんだ？」

「あの時は電波だとか言ってたけど、お前橘を信じたんだな。」

「そりゃあ、あんなことに直面したら信じないわけにはいかねーだ

る」

「あんなことって・・・お前が初めて西野と闘った時か？」

「ああ、あのときは目の前のことが信じられなかったけどよ、俺の中にもそういう存在があるって確認させられたら、不思議と受け入れられた」

「あのときは森野君も頑なだったけどね、信じてくれてよかった。」

と言って微笑む橘・・・っと、危ない危ない。心臓がドキッてなったじゃないか。・・・それにしても気になるなあ

「なあ、どんなことがあったか話してくれないか？」

「まあ、いいぜ。・・・そうだな、まずは――

――」

その話を聞いて、俺は裕志に同情することになる

七話：勝手に操られて勝手に話がすすんでやがる！！？（後書き）

裕志君の回想は次回に続きます

八話：大変だったんだから俺も！！by裕志（前書き）

今回は裕志君の回想シーンでございます

7/6 適当にぼつぽり出したのと、ストーリーの流れに合わなかったなので直しました。前の話しも直すかも知れませぬ

八話：大変だったんだから俺も！！by裕志

(side 裕志：回想)

俺達のクラスのアイドル、橘さんから呼び出しを受け、橘霧樺親衛隊から肅清という名のリンチをくらいそうになったり、その呼び出された橘さんから、俺はいんへりたー？とかいう意味不明なものだつていう電波なことを言われて、橘さんに対する像が崩れたりした日、

「はあ、遅くなっちゃったな」

鬼のような部長のしごきにより、いつもより部活が遅く終わった俺は足早に家に向かっていた。

「あ、ちくしょう、なんでこんな時間まで練習するんだっての！」

学校を出た時刻が7時くらいだったか。辺りはすっかり暗くなつてやがる。

ああ！早く帰らねーと時間がなくなるっつーの！

昨日録つてたけ。おん！！を見なけりやいけないのによお、まったく．．．それに、最近物騒な事件が起こつてゐるから尚更早めに帰らねーといけねーってのに．．．

そう心の中で愚痴りながら、公園を通り過ぎると、

「ひっ！ た、助けてくれええええええええええ！！」

おっさんの悲鳴が聞こえた。

「な、なんだ!？」

チンピラに絡まれてるのか?と一瞬思ったが、次の瞬間その考えは間違いだと気づく

「ったくよお、つまんねえオヤジなんかいちいち狩らせるんじゃないやねえっつーんだよ!」

と、何やら怒りがこもった声とともに――

ざしゅっ

肉が切れるような音が聞こえた。

「!!な……」

驚きで身がすくむ。と、公園の方から……

身長よりもでかい、血がべつとりと付いた大剣を持った仮面をかぶった男が、闇の中から出てきた。

「ああ?目撃者か?ったく、めんどくせーなおい」

そう言つて、男は大剣を剣を構えた。

「な!?!おい、お前なんのつもりだ!」

「ああ?見て分かんねえのかてめえは!」

男がそう叫びながら、剣を振りかざして突進してきた。

「ちょ、おいやめろ！」

「おらあー!!」

と、剣を俺に振り下ろしてきた。

「くっおお!？」

咄嗟に避けれたが、何て速さだ・・・

「ああ?おい、避けてんじゃねえぞ!!」

と、なおも剣を振りまわして襲いかかってくる

「ひっ!くっ、あああ!!」

それも避けながら、公園に逃げ込み、その中を逃げ回っていく。

「待てやてめえ!!」

と言って俺をおいまわしていく。おい、しつこすぎんだろ!!

「のあっ!？」

突然、何かが足に引っ掛かってこけた。足元を見ると・・・

「あ・・・あああ・・・」

胴体を真っ二つにされたおっさんが崩れおちていた。

「ったく、いらねえ手間かけさせやがってよお」

男が悠々とこっちに向かって歩いてくる。

「く、来るな！」

なんとか立ち上がり逃げようとする。

「・・・ほう？よく見りやてめえ・・・はっは！そうか、俺と同じ性質か！」

な、何言っただこいつ・・・『俺と同じ性質』だって？くっ、冗談じゃねえ！

「まあどうでもいいか、発現してねーんだったらそのオヤジと大して変わんねえもんなあ！！」

と言って、俺に剣を振り下ろしてくる。こ、こんなところで俺の人生終了のお知らせかよっ・・・！そう思い目をつぶった。その次の瞬間

ぎいんっ！！

金属がぶつかる音がした。・・・何だ？

「はっ、ようやく出やがったな連続殺人犯・・・」

この声は・・・恐る恐る目を開けてみると

「おい、大丈夫か？」

男の大剣を、剣で受け止めている橘さんがいた。

「え、あ・・・橘さん？」

「ああ、無事みたいだな」

何か口調が変わってやがる・・・まるで、男・・・姐さんみてえな
しゃべり方だ

「はっ！てめえも俺と同じ奴か！！ひやははは！！こいつぁおもし
れえ！！」

と、男が橘さんを蹴りあげようとするが

「はっ！！」

それに合わせて橘さんも蹴りを放ち、両者とも弾かれるように距離
をとった。

「じゃあ・・・せいぜい俺を楽しませろよなあ！！」

と、男が風を切るような速さで橘さんに接近する。が、

「ああ、楽しませてやるよ！！」

橘さんが一瞬のうちに男の懐にはいつていた。

「そうらー!!」

「ちいっ!!」

橘さんが横に一閃、それを男がバックステップで回避する。

「まだまだあ!!」

それを追うかのように踏み込み、連撃をしかける

「ぬうううううう」

それを何とか弾いていく男、このまま行けば勝てるか!?!と思った矢先に

「なめんじゃねえぞ!!」

男が大剣を横に薙ぎ払い、橘さんを吹き飛ばした。

「くっ・・・やっぱり力は馬鹿みてえだな」

くるりと空中で一回転して着地し、愚痴を言う。まったくそのとおりだっつーの!

「まだまだいくぜえええ!!」

と、男がさっきよりも速く駆けだした。

「ざあああつー!!」

橘さんもそれに迎え撃つ。

男が橘さんに向かって剣を振り下ろす。その速さは俺に振り下ろされたときのスピードよりもはるかに速い。が、それをひらりとかわす橘さん

ごがあつー!!

空を切った男の大剣が地面に叩きつけられると、地面が砕けた。な、なんて馬鹿力・・・

「そんな大ぶり、当たるとでもおもってるのか!」

橘さんが男に突きを放つ。・・・そのとき、男がにやりと口角をあげた。何かまずい予感が・・・

「ぬおらあああああ!!!!」

男が突然大剣を振り上げる。

「つくあ・・・」

橘さんが咄嗟に剣を引っ込めようとするが、間に合わずに剣が上に弾き飛ばされた

「寝てやがれ!」

男が橘さんの腹を殴り飛ばした。

「じっ……あ」

「橘さん!!」

橘さんが吹き飛ばされ、倒れこむ。

「はっ、一撃当てると脆いなあ」

くっ……まずいぞこれは

「まあ、てめえはそこで待ってやがれ。……こいつが殺されるのをなあ」

男がこっちを向く。……やばいやばいやばい!!

「なっ……まで……!!」

橘さんがふらふらと立ち上がる。

「てめえのとどめは……こいつを殺してからだっつーの!」

男がこっちに向かって駆けてくる。逃げようとするも、立ちあがった瞬間に

「おらあ!!!!」

男が剣を振り下ろし、それで発生した風で俺を吹き飛ばした。

「うおおおっ!!……がっ!」

宙を舞い、地面に叩きつけられた。

「じゃあな、後であいつも送っというてやるよ!-!」

男が剣を振りかざす。もうだめか・・・!!

『・・・はあ、しょうがないな』

・・・誰だ？

『俺のことよりも、目の前のことだろう』

いや、もう避けられるタイミングじゃねえってこれ・・・

『ほんと手間がかかる・・・いいか、俺の言う事をそのまま口に出せ』

は？なんだってんなことを・・・

『いいからやれって、死にたいのか？』

くっ・・・じゃあ早く言いやがれ!!

『じゃあ言っぞ。』

「おらああああ!!-!」

男が剣を振り下ろしてくる。・・・

「ニードル・バスター!!-!」

と叫ぶと、目の前に光の針が何十本も現れ、それが男に向かっていく

「ぬああああっ!?!」

男がのけぞる。いいぞ、これなら・・・

「こんの、やろおおおおお!?!」

男が更に大剣を振りかぶってくる。

『ああ、こんどはなあ
——ニードル・レイン!』

そう叫ぶと、今度は何百本という光の針が男の上から降ってくる

「ちいいいっ!?!てめえ発現させやがったか!?!」

男が光の針を大剣で防いでいく、すると

「せああああああああっ!?!」

橘さんが男の後ろから剣を振りかぶってくる。

「っ!?!」

男は光の針の対処に戸惑い、橘さんの接近に気付かなかったようで

「斬ッ!?!」

橘さんが一閃、男が咄嗟に大剣で守ろうとするが

「っ!!」

不意を突かれたので、大剣を上弾かれた。そして

「けやっ!!」

男に蹴りを放ち、男を飛ばす。

「がはあっ!!」

「今のうちにっ!!」

男が倒れている隙に橘さんが俺に近づき、俺の服をつかんだ。何やらぶつぶつと言っている

「くっ・・・こんの女あっ・・・!!」

男がよろよろと立ち上がり、大剣を構える。おいおい、橘さん来るぜ!!? 何ぶつぶつ言ってた!!

「招来する惑わしの霧!!」

そう橘さんが叫ぶと、辺りに濃い紫色の霧が発生して、俺達を包んだ。

「ちいつ、どこにいやがる!!」

男の叫び声が聞こえる。ちょ、これ俺たちも見えねえってどういうことだよ!! あいつにばったりと出くわしたらそれだけで終わるぞ

！！

そう思った矢先に、俺の体が宙に高速で飛び上がった。

「ふおおおおおおお！！！！？？？」

「何とか脱出成功だな」

そう、橘さんに服を掴み上げられて跳んでいるのだ、高速で。ちょ、こええ！脱出できたのはいいけどマジこええ！！ジェットコースターも笑いもんになるぞこりゃあ！

「つと」

近くの民家の屋根に着地したらしい。この着地したときの衝撃もばねえ！！

そして、また屋根を跳んでいく。マジで洒落になんねえ怖さだぞこれ！

「おい、怪我ねえか？」

不意に橘さんから声がかかった。怪我はないけど意識が飛びそうだ！

「あ、ああ、なんとか・・・」

なんとか意識を保っていられる状態だよこちら！！

「そりゃあ何よりだな。」

どうでもいいが口調元に戻らねえのかな？・・・まあ、これはこれでいいが

「なあ、お前の家ってどっちだ？」

「え、あ、向こうだけど」

何とか力をだして家の方向を指さす。

「よし、あっちだなっ！」

そういって、急に橘さんが方向を変えた。

「え、ちよ、何を」

次の瞬間、さっきより速いスピードで屋根を跳び出した。

「おおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

思わず声が出てしまった。うわ、なんかちょい情けねえとか思うが、これは仕方ねえよなあ！

「ははっ、しっかりしとけよ！」

そう橘さんが言うが、これ無理！さっきの状態でギリだったのにこれは流石に無理いい！！

そして俺は激しい震動とか風圧とかGとかに必死で耐えていた。

その後、一分もかからずに自宅に着いたが、さっきの超絶ジェット

コースター越え体験により俺は意識がもうほとんど飛びかけていた。

「だ、大丈夫？ 森野君」

家に着いたときに、口調が元に戻った橘さんはそんなグロッキー状態の俺をみてオロオロしていた。うわあ、こんな状態だけどほんとにかわいいなおい

「だ、だい、じょう、ぶだつ……よ」

何とか答える。何か意識がぐるんぐるんしてるぜい

「ご、ごめんね、私の中の人がこんなにしちゃって……」

「も、もんだいないじえー……」

「あゝあ、まったく貧弱だなお前」

……姿も見せねえ野郎にいわれたくねええええええ！！

『うん？ああ、しょうがないだろうが。見せることができないんだから』

なんだそりゃ……もうわけわかんねえよほんとに！

「それにしても、森野君発現できたんだね。もう一人の魂、多分魔術師なんじゃないかな？」

魔術師……ああ、さっきの光の針か。あれ使いやすいしいいな。

「まあ、あの系統で初級までしかつかえないけどな」

・・・は？初級？

『単純に俺からお前に渡る魔力が少ないせいだな、あの系統の初級魔術しか使用できないな今は。』

ちよいちよい、何だよその理屈は！！

『仕方ねーだろ、まあ後々増えていくだろうけどなあ』

大丈夫かよほんと・・・

「森野君、どうかした？」

「え、いや、まあ」

どうやら表情が顔に出てたらしい。・・・一応言っておこうか

「どうやらあれぐらいしか魔術が使えないんだとき。俺が扱う魔力がすくねえんだって」

「それが普通なんだよ。」

「え？」

「継承者の発現には段階があつてね、自分の中の魂が目覚ますと、その魂との《繋がり》ができるの。その繋がりには目覚めた直後だと、大抵はあまり強くないから、魂の扱う力、能力、技術とかは完全には発揮できないのよ」

「・・・な、なるほど」

まあ、つまり魂が起きた直後はあんまり力が使えないってことが

「その繋がりには段々強くなっていくから、そんなに焦らなくても大丈夫だよ」

「そうなのか・・・」

まあ、それならいいか。・・・ん？

「もしかして、その繋がりがつてのが強くなると、人格まで入れ替わるのか？」

「良く分かったね。一定以上に繋がりが強くなったら、表面に出る魂を交換することもできるの。・・・私みたいだね」

あ、なんか照れてる。マジでその仕草グー！！

「さっきのあの人、魂の繋がりがかなり強いよ。あれだけの力を発現させるのにどれだけ時間がかかったんだろう・・・」

・・・ああそうか。多分あれだったら魂も入れ換わってるかもな

「・・・まあ、アイツを倒すって言うのなら俺も協力するぜ」

「え、いいの？危険なんだよ？」

「大丈夫だって。俺の援護、結構便利だと思うしよ」

それに橘さんにだけ危険な思いさせるものかつ！

「・・・ありがとう。それじゃあ、お願い・・・できるかな？」

上目づかいでこちらを見てくる。これはもう・・・

「もちろんだ！！」

思わず親指を立ててしまう。こんな仕草されたらもう断ることもできんしよ！

「ありがとう、森野君！」

その後、橘さんが帰った後にドツと疲れが噴きでて、飯を食った後に風呂に入り、そのまま寝て溺死しそうになったのは別の話だ

(side out)

九話：このテンションも疲れた・・・ああ、明日か（前書き）

更新停止してしまい誠に申し訳ありませんでした。

投稿いたします

九話：このテンションも疲れた・・・あぁ、明日か

(side 候樹)

「つーわけで俺は橘さんと西野を倒すべく協力してんだ」

「……何とか、裕志……不憫……っ！
橘に好き勝手連れまわされて気絶しそうになって、更に風呂場で溺れ死にしそうになるとか……」

「そんな不幸体験してよく橘に協力するなんて言ったなあお前は」

「美少女助けるんだっ たら俺の不幸ぐらいどーってことねーぜ！」

遅しいなあ裕志は。そういえば前にも、街に出かけたとき女の子が
ガラの悪いチンピラの兄ちゃんたちに絡まれてた時に

95

『この世の至宝（美少女）に手え出すんじゃねえええええええ！』

とか言ってチンピラの兄ちゃんたちに特攻していったっけ。後で顔が男爵イモみたいにボコボコになって帰ってきたけど。多分あの子にはフラグが立っているかもしれないな、こいつイケメンだから

『でもオタクだって折れるんじゃないかな？』

居候やつと出てきたか。それはあり得るかも知なう……まあそんな話は道端に石ころと同じようにおいといて

「で、俺もこんな事態に遭遇したわけだから、お前たちといなきや

いけないってわけか」

「つーか、そうでもしねーと危ねえだろうが」

む・・・まあ、そうだけどさ

「候樹君、ちよつといいかな？」

不意に橘が話しかけてきた。まあ、さっきの話からすると突発でもない振られ方だけれども・・・

「どうした？」

「・・・ずっと疑問に思ってたんだけど、率直に聞くね？」

「ああ」

「候樹君のもう一つの魂は、いつ頃から発現していたの？」

居候のことか・・・

「あの超人的な身体能力、もう一つの魂のモノだったとしても圧倒的だった。それに、人格も変わっているようだったから・・・とても繋がりが強い証拠。長い時間をかけなきゃそこまで繋がりが強くならない・・・教えて、いつ頃からその魂は発現したのか」

そうなんだよな、これは話しておくべきか。

「居候曰く、俺が生まれた時から発現しているらしいぞ。つまりは16年ってところか」

「え・・・!？」

「マジか!?!」

なんで嘘つかなければいけないんだよ

「ああ、マジもマジ、大マジだ」

「んだよそりゃあ!っーことはお前、俺と初めて会った時はもう・・・」

「普通に会話もしていたぞ。お前と話しているときも会話していたし、もはや日常の大部分・・・というか常に居候が話しかけてきたから話相手には困らなかったなあ」

「はー、あんときから既に候樹は人じゃ無くなってたってかあ?」

「化け物みたいに言うな。それにまだその時は会話できる程度だったし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

裕志とくだらない話をしているとき、橘は何か考えてるようだった。まだ何か聞かれるのかねえ、俺は

「何で、あれほどの強さを・・・?」

・・・・・・・・ん?

「不完全であろうと、人格が入れ替わったらそれなりの強さになるんじゃないのか？」

「いや、そんな・・・そんなわけあるはずが・・・」

橘が何故か動揺していた。・・・なんで？

「・・・候樹君は、さっき気絶していたけど、もう一つの魂が出てくると、気絶することはあるの。それはさっき候樹君が言ったように魂が出てくるのが初めてか、または慣れてないで無理やりやった時に起きるんだけど・・・でもその場合だったらもう一つの魂の力は不完全でかなり制限された状態になるの。私はまだ見たことがないんだけど・・・多分初めて出るのなら戦闘すらままならないはずなのに・・・」

どうやら居候が出てきたことはかなり衝撃的らしい。なにせ橘は目があちこちに泳ぎながら、完全に動揺してる風だからなあ

『おー、俺ってそんなに凄かったのか。いえーい』

おい居候黙れ、俺だけお前の能天気さのせいでしらけてしまったぞ

「おいおい橘さん、こいつは出すの初めてって言ってるんだぜ！？今橘さんが言った事を当てはめると・・・」

裕志が突っ込んできた。まあ、そりゃあ驚くかもなあ。裕志が言うには居候は出てきた直後から人超えたような真似してるから・・・

「・・・かなり制限された状態であんなことができたのか？」

「候樹君、出すのは本当に初めてなんだよね？」

ああ、大事になってしまったようだ。しかし俺は嘘をついてるわけでもなんでもないの

「ああ、そうだ」

正直に答えることにした。

「・・・なんてこと・・・」

橘はまだ信じられないような顔で、

「候樹、お前K-1出たら優勝できんじゃないかね？」

裕志は能天気にもう返した。

『よし、それなら次の目標は格闘技世界チャンピオン、スパイ。――マッ！になるぞあー』

居候は裕志の言葉を真に受けてわけわからん事を言っている・・・
ってえ！いかんいかん、このままだと收拾不可になってしまう・・・

「まあ、とにかく落ち着こう。な？」

この何ともいえない空気を一転するべく、俺はなだめた

「・・・うん、ごめんなさい」

まあ橘は落ち着いたようだ。早いな落ち着くの

「まあ、俺のことは置いてだ。西野のことについて話し合った方がいいんじゃないか？」

そう、西野のこと・・・人格が変わったということは、魂との繋がりが強いという証拠。それか、俺と居候みたいな規格外だということだ。

「西野の野郎、どんだけ長え間力使ってやがったんだ？」

祐志が言う。そう、裕志と橘が西野と初めて戦闘したときは橘とほぼ互角。そして、さつき学校であった西野は橘と裕志を圧倒していた。

裕志の様子からすると、1日の間に力をつけたってわけだ・・・うわ、なんて成長力・・・

「とにかく、今後の対策を練らないと・・・明日に決着をつけなきゃ手がつけられそうにないよ」

そうだ、明日で決めなきゃもうこちらが終わられる。・・・よし

「俺も戦う」

「え・・・!?だめだよ!さつきはうまく行ったかもしれないけど今度も成功するとは限らないんだよ!？」

「今日よりも強くなるって言うなら、橘と裕志だけじゃ勝てないだろう」

「っ!」

「そりゃあ・・・そうだけだよ」

「だったら、俺も協力しなくちゃ勝てないだろ！それに・・・」

成功するとは限らないとは思えない・・・だつて

「居候だったら、成功するかもしれない」

16年・・・あいつと付き合ってきたんだ。だからって訳じゃないけど、居候ならば、また成功するかもしれない・・・！

(西野side)

くそっ！あいつ・・・僕がとどめを刺そうつてときにっ・・・！

『おいおい、何起こつてやがんだあ？別いいじゃねーかよ明日ぶっ殺せば済む話じゃねーかよ』

ああ、ただあの時に西條を殺せなかった・・・くそっ！

『おいおい、てめえ勘違いしてんじゃねーぞ？さっきからてめえがあいつらぶっ殺そうとしたって聞こえるがよ』

あ？何が言いたい――

『あいつらをぶっ殺すのはてめえと俺じゃねえよ、俺ただ一人だけ

だ
𐤎

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5627k/>

ファンタジーな居候と共に生き抜いてやる！！

2011年10月6日17時00分発行